

To Ahron Dunagan, Secretary to Dr. Shawn O'Driscoll

Mayo Clinic

Orthopedic Research

Med. Sci. 3-69

P: 284-2763

F: 284-5075

07-284-5075

Dear Sir

This is the Japanese abstract which I have translated from English.

背景：内反肘は、単なる整容的変形であると長い間思われてきた。この研究の目的は内反肘変形と肘の後外側回旋不安定症の間の関係を明らかにすることである。

方法：小児期の上腕骨顆上骨折による内反肘 22 肘あるいは先天異常による内反肘 3 肘の合計 24 例 26 肘を対象とした。内反肘変形が生じてから 20 年あるいは 30 年後に遅発性後外側肘関節回旋不安定症が生じていた。全例が肘外側部痛と反復性の不安定症を呈していた。内反肘は平均  $15^{\circ}$  ( $0^{\circ}$  ~  $35^{\circ}$ ) であった。手術は 21 例に行った。外側側副靭帯再建術と骨切り術の併用が 7 例、外側側副靭帯再建術単独が 10 例、骨切り術単独が 4 例、そして全人工肘関節置換術が 1 肘であった。

結果：3 肘において術中に肘伸展位で上腕 3 頭筋を刺激して収縮させた。この収縮が肘後外側亜脱臼を誘発した。矯正骨切り術によって変形した肘頭の内側に停止する上腕 3 頭筋内側頭外側に移動することにより、この亜脱臼は消失した。術後平均 3 年の結果は、22 肘中 19 肘は excellent か good であった。3 例には不安定症が残存した。

結論：内反肘においては、上腕 3 頭筋から肘頭にいたる mechanical axis は内側に偏位する。尺骨に加わる反復性の外旋トルクが外側側副靭帯複合体を伸張させて外側回旋不安定症に至る。したがって、上腕骨顆上骨折後あるいは先天的上腕骨遠位の変形は必ずしも予後のよいものではなく、長期間の臨床経過を行うべきである。上腕骨矯正骨切り術は不安定症の症状を軽減する。予防的骨切り術の適応については決定できなかった。

  
Hiroyuki Kato, M.D.

Hokkaido University Department of Medicine

Sapporo, Japan

FAX 81-11-706-6054